

実践報告

地域振興と連携を目指した講義プログラムの試み 大学の開放授業講座（リカレント教育）を通して英語講義展開

Attempting to new lecturing program for aimed at regional promotion and cooperation
English lecture deployment through recurrent education

植松大介
Daisuke Uematsu

Abstract

平成 28 年 4 月より武蔵丘短期大学（以下本学）は埼玉県より「大学の開放講座（リカレント教育）」を設ける短期大学として制定され、著者が担当する講義「英語コミュニケーションⅠ」がその対象科目に指定された。本学の学生と一般の方々（以下リカレント生）が同じ教室にて英語を学ぶという新しい形での講義運営を行い、ただ学生とリカレント生として分けて展開するのではなく、共に学べるプログラムを試み、今後大学と地域が共に学び、歩んでいけるようなきっかけ作りと位置付けるべく今回行ったものの実践報告である。

キーワード：地域連携、地域振興、リカレント教育、スマートフォン、音声認識型人工知能機能

I. はじめに

平成 28 年度 4 月より、武蔵丘短期大学健康生活学科（以下本学）は埼玉県福祉部が生涯教育の一環として、「大学の開放授業講座」（以下リカレント教育）の開講校の 1 校に指定された。リカレント教育とは埼玉県内の一般の方々が本学学生と共に講義を受講するものである。本年度は前期課程で 11 名、後期課程で 4 名、計 15 名のリカレント受講生を迎え入れ、著者が担当の講義である「英語コミュニケーションⅠ」においての学生とリカレント生が共に楽しく学べる講義プログラムの実施を試みた。

II. 大学の開放授業講座 （リカレント教育）について

【概要】

埼玉県が県と県内・近隣に隣接しているキャンパスを構える大学に協力を要請し、一般の方々が生活の充実や社会参加のきっかけづくりとなることを目指し、大学の授業科目の一部を有料にて受講できるプログラム。

【実施校数】

埼玉県内の大学・短期大学 19 大学。

【開講科目数】

約 200 科目

【対象】

埼玉県内在住 55 歳以上の方々

【費用】

1 万円

【受講回数】

15 回（文部科学省規定の回数）

【今回の受講者の内訳】

参加者：前学期 11 名、後学期 4 名、計 15 名。

男性 5 名、女性 10 名

参加者居住地：

比企郡吉見町：1 名 比企郡川島町：8 名

鴻巣市：1 名 行田市：2 名 北本市：2 名

鶴ヶ島市：1 名

III. 実施内容

基本的には昨年と同様に導入部分において英語への意識付けと音楽・映像メディアを使った「聞き取り・自己表現」を中心に講義を行った。また本年度より新しい取り組みとして、「スマートフォンの言語設定変更」による「音声認識機能を使ったアプリケーション操作と翻訳作業」を取り入れた。

1. スマートフォンの言語設定と音声認識機能の活用

全受講生が携帯電話を保有しており、機種は異な

るが全員スマートフォンを持っている。

対象機種は Apple 社の iPhone と他社の Android 携帯である。

iPhone では使用言語を全て英語表記にするよう指導し、併せて iPhone 独自の人工知能型音声認識機能「Siri」も起動するようにした。また Android 携帯の場合も表示設定を iPhone 同様に英語表記に切り替えた。また音声認識機能としては Google 社の「Google Chrome」を利用した。

2. 目的

この作業で、普段自分達が使っている言葉が英語ではどのように表記されるか理解することと、英語での音声認識を利用し、自分達が出した指令がきちんと英語で伝わり、動作しているかを理解することを目的とした。

3. 内容

(1) 言語設定の変更

受講生の多くはアイコンのデザインを認識していることが多く、大メニューは理解できても、サブメニューや認証に必要な言語がわからず、戸惑っている様子が多く見受けられた。しかし次第慣れ、様々なアプリケーションの表示設定が変更されているにも関わらず、普段使っている SNS 等の画面が理解・操作できるようになった。また言語を日本語に戻す作業は、特別に指示を出さなくても自分達で本来の言語設定に戻すことができた。さらにはそのままの英語設定で活用したいという受講生も多数見受けられた。

【表記設定の一例】

「設定」→「Setting」 「一般」→「General」 「言語と地域」→「Language and Region」
「地域」→「Region」 「完了」→「Done」 「編集」→「Edit」など

(2) 人工知能型音声認識機能の活用

近年のスマートフォンにおける人工知能型音声認識機能の発達には著しいものがある。

特に iPhone に搭載されている「Siri」は非常に精度が高く、様々な言語を認識し、作業ができるといわれている。今回はその Siri を中心に活用し、受講生達に様々な指令を「英語」で出すよう指導した。これは自分の英語がきちんと伝わり認識されれば、

Siri はその指令通りの作業を行い、伝わらなければ、「認識不能」もしくは「目的とは異なった作業」を行うので、「いかに簡潔にわかりやすく伝えるか」という訓練も兼ねている。

この作業は初級・中級・上級編と設定し、徐々に難易度を上げて指令を出すように指導した。

【初級】

Q1: 挨拶をして返答してくれるか。

Q2: 名前を聞いて答えてくれるか。

Q3: どこから来たの? と聞いて製造場所を答えてくれるか。

Q4: Steve Jobs って誰? と聞いてその人物の略歴のサイトへ飛んでくれるか。

【中級編】

Q1: 現在地を聞き、その住所の地図を表示してくれるか。

Q2: 指示通りのアプリケーションを開いてくれるか。

Q3: 現在地の天気を出してくれるか。

Q4: 海外の都市の天気を出してくれるか。

(London, San Francisco, Los Angeles, New York, Sydney, Honolulu, Rio de Janeiro)

【上級編】

Q: 指示通りの情報を基に Application を始動させる。

① タイマーを 15 分にセットしてカウントを始める。(Fifteen と Fifty の使い分け)

② 音楽のプレイリストを表示させ、再生・停止させる。(The がきちんとと言えるか)

③ 武蔵丘短期大学のホームページへジャンプさせる。(Home Page と Web Site の違い)

④ 中級 Q4 の天気と予報を出す。(教えて・見せてという依頼ができるか)

⑤ 日本航空 (JAL) 771 便の行先とフライト情報を出させる。(シドニー)

4. 結果

初級編においては特に問題もなく、指令通りの結果を得ることができたが、中級編から少しバラつきが出始めた。特に都市名の伝え方が非常に難しくうまく認識してくれない受講生を多く見受けられた。

この際“D”, “L”, “M”, “R”, “S”のアルファベットが構成する独特の「音」の出し方をしっかり指導し再度挑戦したところ、ほぼ全員が同一の回答・作業を完遂することができた。しかし、上級編になると認識はされるものの、目的とは異なった作業が行われている様子を多数見受けられた。

上級編の指示文とその誤認識の一例は下記の通りである。

- ① Set the timer for **fifteen** minutes.
(Fifteen:15 を Fifty : 50 と認識される)
- ② Show me **the** music playlist and start **the** music. (The が認識されず作動しない。)
- ③ Jump to Musashigaoka College **Web Site**.
(Home Page という言葉を認識しない)
- ④ Show me **the weather and the forecast** in **都市名**.
- ⑤ What is the destination for Japan Air Line Flight 771(Seven seven one)?

5. 対応

上級編において「この文章を完璧に読めるようにしよう。」ということよりも、「この音をしっかり出そう。」という形で指導を行った。特に舌の使い方、丸め方、唇の噛み方を重点的に指導しある程度の発音ができるように心掛けた。またどうしても解らない場合は事前に「割り箸」を用意し、実際に受講生の口を開け舌先の位置等を指し示した。その結果、ネイティブスピーカーとほぼ同じような発音ができるようになった者もあり、本人も驚くほどであった。

6. 講義を通じての別効果

講義を通して英語に関するものとは別の効果を見ることができた。今回はスマートフォンを活用した講義であったが、特に細かく設定等の指示を行っていない。また今回のスマートフォンの操作は特にリカレント受講生には非常に大変な作業であったと見受けられる。しかし、この設定作業の際に学生が自主的にリカレント生の隣に座り、設定の手伝いや、発音の練習を一緒に行っている光景が多く見受けられた。これはこちら側から学生達にお手伝いするよう指示したものではない。

IV. まとめ

受講生による共同作業を 15 回の講義内で複数回実施し、学生とリカレント生の間でコミュニケーションが円滑に取れるよう心掛けた。その結果、連絡先の交換、学生食堂での食事会、部活動の公式戦での観戦応援等、教室という場所を越えての交流が盛んになっていることが分かった。また今回の試みにおいては、リカレント生に対して特別なアンケート調査は行っていないが、最終課題として「リカレント教育を受講して」というテーマでレポートを作成して頂いた。そのレポートの中には講義のことはもちろんだが、「現役の学生と時間を共有できてよかった」、「学生達に沢山助けてもらった」というコメントが多く見受けられた。さらに本学の学園祭へ一般参加や日本スリーデーマーチ等で本学の出展ブースに足を運んで下さるなど、今回の試みが教室・学校という枠を飛び出し、地域の様々な交流のきっかけになったと考える。さらに今後このような機会を多く設け、大学と地域とが共に学べ、共に活動、振興を深め、関係強化に努めていきたい。

V. 謝辞

今年度より新たな試みとして埼玉県のリカレント教育に参加し、様々な形式の講義運営を実践することができた。多くの先生方にアドバイスやアイデアを頂き、有効かつ効果的な講義運営方法を日々研鑽する機会も頂いたことに、厚く御礼申し上げます。

